

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

土曜日の午後は、息子の家へ行ってくつろぐのが、きよの習慣になっていた。

六年前に夫を見送ったあと、息子娘が心配するのを、手に和裁という職があるから、自分の身じんまくは自分でする、といつてその言葉どおり一人住みなのである。娘のころからずっとひいきにしてくれる呉服屋さんが、割のいい仕事を選んでまわしてくれるから、収入が安定していてしあわせである。弟子も、二階の二部屋ぶつこぬきの仕事場にほぼいっぱい、みな a エンゴで断りきれなかった人ばかりだが一人残らず通い制にして、内弟子はおかない。内弟子をおいて親しくすれば、自分の 1 気持ちがあうじゃやけそうでもないやだ、という。月曜から土曜の正午までみっちり働く。五日半の緊張は、気分にもしこりがくるし、身も疲れる。気をほぐすのには、息子のうちの茶の間よりいいところはなかった。気のいい、ものごしの優しい嫁と二人の孫は、この上なくきよの気をやわらげる。そして日曜は自由気ままに、あさ寝もひる寝も好きにして、身を休める。まずはいい老後といえた。

その日は栗ごはんにするからと引きとめられ、きよもゆつくりするつもりで、栗むきを手伝っていた。すると孫たちがけんかをはじめた。一年生の妹が三年の兄に、なぜ下駄やさんは看板に下駄店と書かずに、おはきものと書くのか。おはきものとは何のことか、ときいたのがけんかのもどだった。

「いまはもう下駄、はかないもの。下駄店じゃ時代に合わないさ。ぞうり店でもセンスわるいだろ。だから、おはきもの、としたんだと思うけどな。はきものというのは、足にはくものという意味だから、ぞうりも下駄もサンダルもふくまれちゃって、都合いいじゃないか。」

最初からはきものというのが気にいらならしい妹は、ぬからず逆らった。それなら靴はなぜ靴店でもいいのか、なぜおはきものと書かないのか、と。逆襲に閉口した兄は、千代つべはしつこくて根性曲がりだとこきおろすし、妹は得意で、お兄ちゃん負けだとよろこび、そのあげくカッとした兄が暴力をふるって、妹の肩をこづいて、泣かせたが——きよはそのけんかで上の孫が「いまはもう下駄はく人はいないもの。」といったひと言が不意につうと胸にしみてきて、三十年も以前の回想のなかへ引きこまれ、栗むきの手を休めてしまったのさえ気付かずいた。

その記憶のなかには柾目のごまかい桐の台へ濃紺のはな緒をすげた、小粋な下駄一足が、あざやかに見えていた。その下駄はいまもまだ、丁寧に包んだなりしまつてあるはずで、しまつておいた場所もあの押し入れの、あの行李のわき、とわかつていた。そうだ、あれを出してみよう。出してはこう。あたしのほかのだれのものでもない下駄なのだから、惜しがるあまりになまじりしまったきりでおくより、はいて、はいて、はきぬいてしまおうほうが、かえつてやさしくもあるうか。そう、そうしよう、ときよは思った。

「ねえ、すまないけど、急にあたし帰りたくなった。栗ごほん、そのうちもう一度炊いてちょうだい。」

「ごほんはいつでもまた炊きますけど、どうしたんですか。」

「いえね、下駄なのよ。千代ちゃんたちのけんかだね、急に、しまつといた古い下駄を出してみたくなったの。」

数えの十九歳、きよはもうすぐれたお針子で、家のささえになつていた。弟が二人いて、それが頭がよかつたので進学したが、いきおいきよは懸命に **b** カセいだ。呉服屋に目をかけられたのは、そのころからである。むろん仕立て代はそっくり母に渡したが、時折呉服屋のおかみさんが心付けをくれる、それだけが自分の小遣いだった。きよはそれで下駄を買うのが、たった一つの楽しみだった。下町では化粧より髪より着物より、足を美しく、足もとをすずやかにという風俗が、根強く受け継がれていた。それにきよの足はほそく、指がすんなりして、かかとが丸かつた。細身で、少し粋好みな下駄がよく似合うのだった。といつても買える範囲のものは、せいぜいが中の下という級の品だが、それでも、見、見、見して喜びにあふれて選ぶ。はな緒はしそ紫が好きだった。

隣町に品が豊富で、応対の静かな店があつた。品が多いから選みがきいて、買いやすい。きよはいつもわざわざそこへ行く。ある日、そこにその青年がいた。どこの店でも中級品以下は、主人でなく店員が扱う。その人は一度できよの好みをおぼえてくれ、二度目に行った時には、黙つていたのにはな緒の締めぐあいを、ぴたりにしてくれた。つまり一度で、なじみ並みのサーヴィスをしてくれた。それは買ひ物の喜びを倍にもした。こころよい買ひ物だった。

はたち、二十一。きよの財布は相変わらず普段ばきしか買えず、その人も相変わらず下働きをつとめて、控え目だった。

七月、うらぼん。この月と十二月には毎年、母と弟たちへ中元のしるしに、新しい下駄を贈る。自分のもませて四足のはな緒をすげるのを待

つ間に、ふと見るとそこに繁柱というか、糸柱というか、みごとな女物が出ていた。思わず手にとつて、見惚れた。一分置きほどの間隔に、すうんと素直に、まっすぐに伸びた木目の美しき。たいした材なのだ。こしらえも薄手で、^c 華奢なくせに、粹にならず上品である。手から放せない魅力があった。

「気に入りましたか。」

びつくりした。いつもほとんどしゃべらない人だから、そんなふうには話しかけられるとは、ほんとに思いがけないことだった。反射的に、一生に一度でいいから、こんな柱がほしいわといった。主人がちらとこちらを見た。きよは恥ずかしかつた。しよせん手の届かぬものに心奪われたのが、きまり悪かつた。でも、きまり悪さはちよつとのまのこと、それはそれ、これはこれ、普段ばきでも四足の新調はうちのなかを明るくしたし、やはり満足感があつた。

その晩、また思いがけないことに、その人が訪ねてきた。

「ぜひこの一足をあなたにはいてもらいたい、そう思つて仕上げた。しかし、主人が上物は扱わせてくれないので、自費の材料ゆえ粗末で恥ずかしい。かなりなくせのある木目で、今日のあれとは比べものにならない。気を悪くされやしないかと心配だが、くせがあるだけに仕事に手間はかけた、それだけが価値だ。」といつもの無口に似ず一気に話し、はつとして ² 自分の気負いかたに気付いてあわて、あすは東京をはなれ、故郷へ帰るものだから、ついせかせかして、と詫びた。

なるほど、それは齒に当たるあたりに、二段のくせがあつた。おそらく根に近い、土ぎわの部分の材であり、そう木取るよりほかない材だったとしか思えぬ。はけばそう目立たないから、そそっかしい人は、なんと贅沢なのを履いてるのかとほめる。 ³ そうなるとどうしてもひと言そのあらを話さずにはいられないし、あらをあげれば下駄にもその人にもうしろめたい。へんな感じだった。それに正直いうと、歩く当たりがあまり柔らかい下駄ではなかつた。土の上を歩くと、土も下駄も両方とも固いという触感があり、固いもの同士がぶつかり合つて、なにか足が難儀だという気がした。はきにくいとはいわれないが、軽快でらくというのではなかつた。きよはしみじみ思つた、下駄というのは、はいた時の気持ちのよさと、脱いだ時の見付きのよさと、二つながら備わることが肝心だ、と。

いずれにもせよ、いちばん心にかかつたのは、くせのある木のいとしさ、くせのある材に多分並ならぬ手間をかけたであろうその人の哀しさ、

そしてまたくせを贈られた自分は、いったいどういふ巡りあわせか、ということ。それは考えてわかることではなく、ただ、二者ともに通じるのは、ふしあわせな環境におかれたとき我慢する能力がある、という点だった。

しかしこのおかげで、きよはともかくにも繁桎をはいたのである。たしかに歯は減りがおそく長もちした。はき捨てるのは惜しく、近所の歯つきへもつていった。するとおやじさんは見るなり、ほうと声をあげ、珍しい下駄だといった。そして新品のように仕上げ、この歯はおれでないと継げないよ、と自慢した。桎のつまったくせ木が継いであった。そのつき禿びた時、そのおやじはもういなくて、他の人に頼んだ。その人も目をみはつて、やりにくい仕事だがためしましようといい、同じように自慢じゃないがほかじゃできまいと笑った。

最初えんじだったのはな緒は、二代目にはしそ紫、そして今度は濃紺になった。このつきはもう歯つきはできない。なぜならもう削る余地のないほどに、甲もうすく脚も短くなっていたからである。こんどはき減らせば、もう別れであり、きよはそれをいとおしんだ。そこはかとな執着が、あの人と下駄とを結んで漂っていた。それ以来「しまつてある下駄」だった。戦争中にも、一行李だけ疎開させた荷物の中へ入れて――。

三十年を経た、くせ下駄は、たしかに当時よりずっと目方が減つて、手に軽かった。はな緒の紺も落ち付いて深い色をしている。磨きがかけてある木肌は、艶をふくんでやさしい。記憶のなかではなにか固々としたおぼえがあるのに、いま見れば案外に柔らかみがあった。下駄は三十年のきよの心にこたえて、見勝りする姿である。

来週の土曜はこれをはいていつて、まず第一に嫁の春子に、由来をきかせようと楽しかった。

問一 点線部 a 「エンコ」・ b 「カセ(いだ)」・ c 「華奢」を漢字は平仮名に仮名は漢字に直して答えよ。

問一 本文中より読み取れる老後の「きよ」の性格として明らかに不適当なものを、次の中より一つ選び、記号で答えよ。

- ア 他人に依存することを潔しとしない自立した女の誇り高い性格。
- イ 年を取ったことを理由に自分を甘やかそうとしない凛とした性格。
- ウ 優柔不断に悩まず、素早く自分で決断し行動に移せるきっぱりした性格。
- エ 年老いてもなお、子供の世話になりたくないというかたくなで頑固な性格。
- オ 気のいい嫁と反りが合わず、決して息子夫婦と同居しようとしなない猜的な性格。

問二 傍線部1「気持ちがあうじゃやけそうで」とあるが、「うじゃやけ」ることと対照的な状態を表した言葉を本文中より抜き出して答えよ。

問三 傍線部2「自分の気負いかたに気付いて」とあるが、なぜ「気負」っていたのか。次の選択肢より、その理由として適当なもの、次の中より二つ選び、記号で答えよ。

- ア きよに対する思慕の念が強かったから。
- イ 普段無口なのに一気にたくさん話したから。
- ウ 自分の手間をかけた仕事に自負があったから。
- エ 貧しいながらも奮発した材に自信があったから。
- オ 明日は故郷に帰らねばならず、焦っていたから。

□ 次の A・B・C の文章を読んで、後の問いに答えよ。

A

私たちの日常生活はまことに記号だらけである。数学の演算記号、交通信号、モールス信号、地図の標識といった典型的な記号に限らず、私たちは人の涙や笑いやしぐさで他人の感情を推し量り、服装によってその人のセンス、人柄、職業を見分けている。このような喜・怒・哀・楽を示す表情やジェスチャーも、身にまとう衣服やアクセサリーも、全て何事かを伝えてくれるかぎり、りっぱな記号と見なすことができるだろう。けれど記号とは「自分とは別の現象を告知したり指示したりするもの」であり、特定文化内の儀礼、音楽、絵画、彫刻、演劇、建築なども、広義の記号性を完全には免れていない。ちなみに辞典にあたってみると、記号とは「一定の思想内容を示すための手段としての、文字・符号などの総称」と定義されており、続いて「言語も、記号の一つと考えられる。」とある。

言語記号を記号の代表・典型と見なしてその本質を追究した記号学の歴史は古い。これを最初に体系化したのはストア学派であるが、更に遡って、アリストテレス、プラトン、ソフィストたち、またデモクリトス、ヘラクレイトスの考え方にまでその淵源をたどることができるのである。この二千年以上にわたる歴史を支えてきた記号観は、常になんらかのオリジナルを指差しているコピーとしての記号を根底に置いていた。「本物を指差す代用品」と言ってもよい。例えば「停止せよ。」という命令が本物であるとすれば、これに代わってその命令を伝えるのが赤信号である。これと同じように、愛という普遍的観念の代用品は、時に「アイ」であり、時に Love であり、また時によっては amour や Liebe であったりする。代用品であるからには、いくら「愛」という語を唱えてみても心は温まらないし、相手からは「実がない。」と責められるのがおちであろう。そしてこのよう

な ¹ 〈記号Ⅱ代用品〉 観は、当然にも本物の存在を前提としており、言語以前の事物や普遍的カテゴリーの存在自体は、一度として疑われることがなかった。

記号が指差す先にある事物や概念を、一部の哲学者は〈対象物〉と呼んでいる。先の例で言えば、赤信号の指向対象は「停止

せよ。」という命令であるし、「愛」の指向対象は「人やものを慕い、慈しむ気持ちそのもの」であることになる。しかしながら、よく考えてみると、同じ記号と呼ばれてはいても、言語記号とその他一切の記号類との間には、本質的な違いがありはしまいか。赤信号の場合には、それがどんな赤色であろうと——単にその濃淡に限らず、緋色であれ、紅であれ、ワインレッドであれ——いつも同一の意味を送り返すのに対し、愛と Love と amour とでは、それぞれに意味内容がずれ合っているし、同じ日本語の「愛」ですら、その語を口にする人間が置かれるさまざまな状況しだいで微妙な差異が生じてくるのではないだろうか。それどころか、異なった心情的態度の多様なあり方を一つに集めて概念とするのは、「愛」という言葉があつて初めて可能になるのではなからうか。

I

常識では「名付ける」という行為は、既に存在する人間や事物にラベルを貼りつけること以外の何ものでもあるまい。赤子の誕生と存在が、命名以前の出来事であることは疑いもないし、犬の名前にしても、例えばもらつてきた犬をポチと名付けるとすれば、「ポチ」より「犬」のほうが先であるというのはあたりまえの話だ。しかし、「赤子」というのもまた一つの名称であれば、「犬」というのも名称にはかならぬ。「赤子」と「子ども」を区別しない言語もあれば、「犬」と「狸」が同じ一語のものにくくられる言語もある。そのような言語内では、「赤子」も「犬」も、日本語内でのような存在の仕方をしていない。そうしてみると、「存在が名称に先立つ。」という結論を軽々に下すわけにはいかないだろう。メルロ・ポンティは「事物の命名は認識のあとになつてもたらされるのではなくて、それは認識そのものである。」と言っている。私たちはともすれば、言葉以前に何かを明確に認識して、それからその認識した対象に名前を付ける、というふうに思いがちである。しかし幼児にとって〈対象物〉というものは、それが名前を持った時に初めて知られ、存在するのである。

II

古代から名称にまつわる神話や信仰は少なくない。例えばエジプト神話には、太陽神ラーがそれまでひたすら隠していた本名を女神イシスに知られたために、イシスがその力を奪つて全能となるという話がある。イギリスの人類学者フレーザーによれば、現代でも、オーストラリア南部に住むユイン族にあつては、父親は入団儀礼の際に息子にだけ自分の名を打ち明けるが、他の人々には隠し続けるという。

また、その名を口にすると危険な動物が出てきて害をなすことを恐れるあまり、熊のことを、スラブ語では「蜂蜜」と言ったり、古代高地ドイツ語では「褐色のもの」と言ったりして、仮の名で呼んだ慣習も珍しくない。これは全て「名が対象と同じ力を持つ、もしくは対象を出現させる。」という言霊思想であり、我が国の雨乞いの儀式もその一つと考えられよう。アツカド語では「存在する」と「命名する」とはシノニムなのである。

III

そうしてみると、名というのはむしろ事物の本質であって、事物そのものが名とともに初めて分節され、存在を開始すると言えないだろうか。名付けとは、言葉による言語外現実の一つの解釈であり、差異化である。そして世界が差異化されると同時に、主体の意識のほうも同様に差異化される相互作用を見逃してはならないだろう。

IV

「名付ける」という行為は、右に見たような二つの全く次元を異にする作用を持っている。一次的には、それまで分節されなかった観念や事物のマグマに区切りを入れて、これを存在せしめる根源的作用であり、二次的にはそのようにしてつくられた存在にラベルを貼る作用である。具体的に言えば、日本語を母国語とする人々にとって「犬」と「狸」は別の動物であるかのような意識を生み出させるもととなった命名行為が前者であるとすれば、もらってきた犬に「ポチ」と名付ける命名行為は後者であるということになる。

V

他の一切の記号と違って、言語は右の二つの命名行為を行う。多くの人々にとって、言語とは既に知っている事物や概念の（名前のリスト）にすぎないように思われる理由もそこにある。しかし言語が、「名付ける」ことによって文化を形成する力を持つことのほうは、往々にして見逃されがちではなかったか。それだけではない。「言葉によって世界が分節され、事物が生まれる。」というテーゼには、「言語記号が指向対象を生み出す。」という認識・存在論的なたらきに加え、「言葉が可能にした思考によって道具一般が製作され、その道具類やこれを用いる生産活動が、世界をつくり出す。」という実践的レベルも含まれているのである。

いわゆる道具類の使用によって、外界がいかに変貌するかを考えてみよう。古代の人々にとって、宇宙の秩序というものが、最初から決定的に人間の介入を許さずに決められているものでないことに初めて気づいた時の驚き、また（道具）を変えること

によって同時にその効用しだいで区分けされていた外界を変化させ、この仲介によって自分たちの世界像や世界観をも変えることができることに気づいた時の驚きは、まことに想像を絶するものであったにちがいない。いわんや近代、現代においてをや、である。ごく身近な話、風も水も空間も人間が道具によってつくり出す。じょうろで散水する水と水道の蛇口からほとぼる水、うちわが分節する風と冷暖房機が分節する風の違い、ふすまや障子で仕切られる日本の生活空間と、錠の掛かるドアが仕切る欧米の生活空間の違いが、そのまま世界観の違いや人間関係の把握の違いに通ずるのは、先ほどの、世界と意識の相互差異化がもたらす結果と言えるだろう。

言語記号とは、まことに奇妙な記号である。 2 平素は他の一般記号と同じように振る舞い、その仮面の下に本性を隠している不可思議な記号である。

(丸山圭三郎の文章による)

- 1 「サリン事件」——宗教団体「オウム真理教」（現在は改名）の信者たちが神経ガスである「サリン」を地下鉄に散布し、多数の乗客や駅員を死傷させた、無差別大量殺人事件のことである。
- 2 『ねじまき鳥』——一九九二～九五年に発表された長編小説『ねじまき鳥クロニクル』のこと。物語の舞台として旧満州国（現在の中国東北部）が登場する。
- 3 ノモンハン——一九三九年にソ連軍と日本軍の大規模な紛争があった、中国東北部のモンゴルとの国境に近いハルハ河畔の地名。

問一 次の文は、Aの文章中に入れるべきものである。I V から最も適当な箇所を一つ選び、解答欄の記号を正確に○で囲め。ただし、○が複数の記号にかかる場合には、正解としない。

別の言い方をすれば、言語はできあがっている事物や観念の上に貼りつけられる名前だけではないだろう、ということである。

問二 Aの文章中の傍線部1「〈記号Ⅱ代用品〉観」について、以下の(1)・(2)の問いに答えよ。

(1) この言語観を端的に表現した箇所を、Aの文章中から九字(句読点等を含まない)で抜き出して記せ。ただし、楷書でない場合は正解としない。

(2) この言語観が否定される根拠の例として適当でないものを、次のア～カ(それぞれの命題は真である)の中からすべて選び、解答欄の記号を正確に○で囲め。ただし、○が複数の記号にかかる場合には、正解としない。(完答)

ア もらってきた犬にポチと名付ける。

イ 羊のことを、フランスの語では「mouton」、英語では「sheep」と言うが、それぞれの語の意味の幅や厚みは異なる。ウ イタリア語の「bambino」は、「赤子」と「子ども」を区別しない。

エ 虹の色を、日本語では、七色(「赤」「橙」「黄」「緑」「青」「藍」「紫」)に分けて説明するのに対し、日本語の「青」と「藍」をまとめて「blue」とする英語圏では、六色に分けて説明する。

オ 日本語の「犬」と「狸」が同じ一語のもとにくられる言語もある。

カ 赤信号は、それがどんな色であろうと、いつも同一の意味を送り返す。

問三 Aの文章中の傍線部2「平素は他の一般記号と同じように振る舞い、その仮面の下に本性を隠している不可思議な記号である。」とあるが、「仮面」（Ⅱ前者）、「本性」（Ⅱ後者）についての説明として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 前者は、既に存在する人間や事物にラベルを貼り付ける作用であり、後者は、それまで分節されなかった観念や事物に区切りを入れて存在させる作用である。

イ 前者は、観念や事物を分節化し対象を存在せしめる作用であり、後者は、道具類の使用によって世界をつくり出す作用である。

ウ 前者は、いつも同一の意味を送り返す作用であり、後者は、使用する状況のちがいで意味に微妙な差異が生じる作用である。

エ 前者は、自分とは別の現象を告知したり指示したりする作用であり、後者は、既に存在する人間や事物にラベルを貼り付ける作用である。

オ 前者は、既に存在する事物や観念に名前を付ける作用であり、後者は、言葉が可能にした思考によって製作された道具が既存の社会を破壊する作用である。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私たちの日常生活はまことに記号だらけである。数学の演算記号、交通信号、モールス信号、地図の標識といった典型的な記号に限らず、私たちは人の涙や笑いやしぐさで他人の感情を推し量り、服装によってその人のセンス、人柄、職業を見分けている。このような喜・怒・哀・楽を示す表情やジェスチャーも、身にまとう衣服やアクセサリーも、全て何事かを伝えてくれるかぎり、りっぱな記号と見なすことができるだろう。けだし記号とは「自分とは別の現象を告知したり指示したりするもの」であり、特定文化内の儀礼、音楽、絵画、彫刻、演劇、建築なども、広義の記号性を完全には免れていない。ちなみに辞典にあたってみると、記号とは「一定の思想内容を示すための手段としての、文字・符号などの総称」と定義されており、続いて「言語も記号の一つと考えられる。」とある。

言語記号を記号の代表・典型と見なしてその本質を追究した記号学の歴史は古い。これを最初に体系化したのはストア学派であるが、更に遡って、アリストテレス、プラトン、ソフィストたち、またデモクリトス、ヘラクレイトスの考え方にまでその淵源をたどることができるのである。この二千年以上にわたる歴史を支えてきた記号観は、常になんらかのオリジナルを指差しているコピーとしての記号を根底に置いていた。「本物を指差す代用品」と言ってもよい。例えば「停止せよ。」という命令が本物であるとすれば、これに代わってその命令を伝えるのが赤信号である。これと同じように、愛という普遍的観念の代用品は、時に「アイ」であり、時に *love* であり、また時によっては *amour* や *Liebe* であったりする。代用品であるからには、いくら「愛」という語を唱えてみても心は温まらないし、相手からは「実がない。」と責められるのがおちであろう。そしてこのような（記号Ⅱ代用品）観は、当然にも本物の存在を前提としており、言語以前の事物や普遍的カテゴリーの存在自体は、一度として疑われることがなかった。

記号が指差す先にある事物や概念を、一部の哲学者は（対象物）と呼んでいる。先の例で言えば、赤信号の指向対象は「停止せよ。」という命令であるし、「愛」の指向対象は「人やものを慕い、慈しむ気持ちそのもの」であることになる。しかしながら、よく考えてみると、同じ記号と呼ばれてはいても、言語記号とその他一切の記号類との間には、本質的な違いがありはし

まいか。赤信号の場合には、それがどんな赤色であろうと——単にその濃淡に限らず、緋色であれ、紅であれ、ワインレッドであれ——いつも同一の意味を送り返すのに対し、愛と Love と amour とでは、それぞれに意味内容がずれ合っているし、同じ日本語の「愛」ですら、その語を口にする人間が置かれるさまざまな状況しだい微妙な差異が生じてくるのではないだろうか。それどころか、異なった心情的態度の多様なあり方を一つに集めて概念とするのは、「愛」という言葉があつて初めて可能になるのではなからうか。別の言い方をすれば、¹ 言語はできあがつている事物や観念の上に貼りつけられる名前だけではないだろう、ということである。

常識では「名付ける」という行為は、既に存在する人間や事物にラベルを貼りつけること以外の何ものでもあるまい。赤子の誕生と存在が、命名以前の出来事であることは疑いもないし、犬の名前にしても、例えばもらつてきた犬をポチと名付けるとすれば、「ポチ」より「犬」のほうが先であるというのはあたりまえの話だ。しかし、「赤子」というのもまた一つの名称であれば、「犬」というのも名称にほかならぬ。「赤子」と「子ども」を区別しない言語もあれば、「犬」と「狸」が同じ一語のもとにかくられる言語もある。そのような言語内では、「赤子」も「犬」も、日本語内でのような存在の仕方をしていない。そうしてみると、「存在が名称に先立つ。」という結論を軽々に下すわけにはいかないだろう。

メルロ・ポンティは「事物の命名は認識のあとになつてもたらされるのではなくて、それは認識そのものである。」と言っている。私たちはともすれば、言葉以前に何かを明確に認識して、それからその認識した対象に名前を付ける、というふうに思いがちである。しかし幼児にとって（対象物）というものは、それが名前を持った時に初めて知られ、存在するのである。

古代から名称にまつわる神話や信仰は少なくない。例えばエジプト神話には、太陽神ラーがそれまでひたすら隠していた本名を女神イシスに知られたために、イシスがその力を奪つて全能となるという話がある。イギリスの人類学者フレーザーによれば、現代でも、オーストラリア南部に住むユイン族にあつては、父親は入団儀礼の際に息子にだけ自分の名を打ち明けるが、他の人々には隠し続けるという。

また、その名を口にすると危険な動物が出てきて害をなすことを恐れるあまり、熊のことを、スラブ語では「蜂蜜」と言つ

たり、古代高地ドイツ語では「褐色のもの」と言ったりして、仮の名で呼んだ慣習も珍しくない。これは全て「名が対象と同じ力を持つ、もしくは対象を出現させる。」という言霊思想であり、我が国の雨乞いの儀式もその一つと考えられよう。アツカド語では「存在する」と「命名する」とはシノニムなのである。

そうしてみると、名というのはむしろ事物の本質であつて、事物そのものが名とともに初めて分節され、存在を開始すると言えないだろうか。名付けとは、言葉による言語外現実の一つの解釈であり、差異化である。そして世界が差異化されると同時に、² 主体の意識のほうも同様に差異化される相互作用を見逃してはならないだろう。

「名付ける」という行為は、右に見たような二つの全く次元を異にする作用を持つている。一次的には、A それまで分節されなかつた観念や事物のマグマに区切りを入れて、これを存在せしめる根源的作用であり、二次的には B そのようにしてつくられた存在にラベルを貼る作用である。 具体的に言えば、日本語を母国語とする人々にとって「犬」と「狸」は別の動物であるかのような意識を生み出させるもとなつた命名行為が前者であるとすれば、もらつてきた犬に「ポチ」と名付ける命名行為は後者であるということになるう。

他の一切の記号と違って、言語は右の二つの命名行為を行う。多くの人々にとって、言語とは既に知っている事物や概念の〈名前のリスト〉にすぎないように思われる理由もそこにある。しかし言語が、「名付ける」ことによつて文化を形成する力を持つことのほうは、往々にして見逃されがちではなかつたか。それだけではない。「言葉によつて世界が分節され、事物が生まれる。」というテーゼには、「言語記号が指向対象を生み出す。」という認識・存在論的なたらきに加え、「言葉が可能にした思考によつて道具一般が製作され、その道具類やこれを用いる生産活動が、世界をつくり出す。」という実践的レベルも含まれているのである。

いわゆる道具類の使用によつて、外界がいかに変貌するかを考えてみよう。古代の人々にとって、宇宙の秩序というものが、最初から決定的に人間の介入を許さずに決められているものでないことに初めて気づいた時の驚き、また〈道具〉を変えることによつて同時にその効用しだいで分けられていた外界を変化させ、この仲介によつて自分たちの世界像や世界観をも変えるこ

とができることに気づいた時の驚きは、まことに想像を絶するものであったにちがいない。いわんや近代、現代においてをや、である。ごく身近な話、風も水も空間も人間が道具によってつくり出す。じょうろで散水する水と水道の蛇口からほとばしる水、うちわが分節する風と冷暖房機が分節する風の違い、ふすまや障子で仕切られる日本の生活空間と、錠の掛かるドアが仕切る欧米の生活空間の違いが、そのまま世界観の違いや人間関係の把握の違いに通ずるのは、先ほどの、世界と意識の相互差異化がもたらす結果と言えるだろう。

言語記号とは、まことに奇妙な記号である。平素は他の一般記号と同じように振る舞い、その仮面の下に本性を隠している不可思議な記号である。

問一 波線部 A・B とあるが、次のアウウの各例は A・B のいずれの作用に該当するか。それぞれ該当する記号を答えよ。

ア 「複数のものを合わせること」という概念に「+」という記号をつけること。

イ 「ある濃さの赤色」を「えんじ色」と呼ぶこと。

ウ 「生まれてきた自分の息子」に「太郎」と名づけること。

問二 傍線部1「言語はできあがっている事物や観念の上に貼りつけられる名前だけではないだろう」と推察される理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 言語が既存の事物や観念に貼り付けられる名前だけであるのであれば、多くの心情的態度を新しい概念として一つの言葉で表すことが可能であるから。

イ 言語が既存の事物や観念に貼り付けられる名前だけであるのであれば、異なる文化圏の言語によって実在のものを指し示す言語が共通であるはずがないから。

ウ 言語が既存の事物や観念に貼り付けられる名前だけであるのであれば、言葉だけで心情を表現しようとしても真にその思いが他者に伝わるとは限らないから。

エ 言語が既存の事物や観念に貼り付けられる名前だけであるのであれば、数学の演算記号や地図の標識といった典型的な記号との間にその指し示す対象の違いがあつてしかるべきであるから。

オ 言語が既存の事物や観念に貼り付けられる名前だけであるのであれば、複数の概念を言葉によって初めて一つにまとめることなどできるはずがないから。

問三 本文の内容として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 言葉によって世界が分節化されて世界が作りかえられることによって、われわれの世界観もまた、他の言語圏との間で異なってくる。

イ 「言霊思想」とは、名を口にするとそのものが出てきて害をなすため、仮の名前をつけなくてはならないという考え方である。

ウ 言語記号は通常の記号一般とは異なり、既存のものに名をつけるのではなく、世界を差異化し主体の意識を差異化する働きのみを持っている。

エ 辞書的な意味や伝統的な記号学においては、言語は記号の一種であるとされているが、実際には言語と記号は本質的に違うものであり言語を記号とみなすことはできない。

オ 既存の事物に名前をつけることによって世界は分節化され、各言語文化ごとの道具や価値観が生み出されていくだけでなく世界のあり方も変わっていく。